

産業医 訪問

第9回

株式会社三越伊勢丹 三越日本橋本店

まつだ まさみち
産業医 松田 正道 氏

企業経営を支える健康管理を实践

私は1984年に高知大学医学部を卒業しました。旧医科大学の1期生です。手塚治虫の『ブラック・ジャック』に感化され医者になったので、卒業後の進路は外科しか考えませんでした。神奈川県逗子生まれの東京育ちですが、高知が気に入って、卒業後は大学病院に残るつもりでした。しかし当時、高知は外科の症例数が少なく、数年間東京で武者修行をするつもりで、虎の



門病院に外科レジデント（病棟医）として入りました。

卒業後の4年間に外科系の16科をローテートし、レジデント終了後に消化器外科（肝胆膵）に入局しました。その後30年以上虎の門病院に勤務し、主としてがんの診断・手術・化学療法・緩和医療に携わってきました。

しかし50歳を迎える頃から、外科医として活躍できる年数には限界があると感じるようになりました。

後半の医者人生で、医療資源としての自分を有効活用できる場を模索し、地域医療、医務官、産業保健を考えていました。ご縁があつて三越伊勢丹からお誘いをいただき、55歳の時に三越日本橋本店に産業医として飛び込みました。

産業医になった当初は、「命は地球より重い」というルールで動く病院と、あくまで「ビジネス」のルールで動く会社とのギャップに悩みました。現在は「会社が安定して事業を継続していくために、売り上げの作れる健康状態

に従業員を管理しサポートする」のが産業医としての任務と考えています。つまり会社が正常に機能し、収益を上げることができるよう、従業員を身体・精神面から管理する、いわば「労務的な健康管理」です。その上で個々の従業員に対しては、できるだけ医療的なサービスも提供できるよう心がけています。

健康弱者に寄り添い就労を支援

常に考えているのは、「企業内になぜ医者をおくのか」です。単なる労務的健康マネジメントであれば、多少医療を知った労務担当者の方が産業医に勝っています。産業医は医療専門職としての特別なサポートを、会社・従業員にいかに対応するかを考える必要があります。

たとえば、がんを抱えた従業員の健康管理です。多くの企業に設けられた「がん相談窓口」は、「病気を悪化させない」、「労災を発生させない」措置を講じ、いかに長く安定した雇用を継続できるかを労務的視点で考える健康管理です。対して私が社内を設置した「がん相談窓口」は、がん罹患した従業員が抱える不安、つまり、聞きたいことがあるがどこに相談したらよいかかわからない、不安で落ち着かない、治療や検査、医療費制度について聞きたいといった悩みに寄り添い、ともに考え、

ある一定の方向性を示すといった医療的サポートを目的としたものではありません。家族のがん相談に来られる方もいます。出社していても仕事に身が入らないのは、従業員自身が「がん」と宣告された場合だけでなく、家族が「がん」に罹患しても同様です。家族ががんになったとき、どこに相談したらよいかわからない、自分には何もできないと

いった喪失感を抱え、心配で仕事に手がつかなくなります。

職場に相談窓口を設けることにより、従業員に寄り添った支援を行い、少しでも安心して働ける環境を提供でき、結果的に会社の収益向上に寄与できると考えています。この「がん相談窓口」は大変好評で、地方の支店からも相談に来られます。

一方今年に入ってから、新型コロナウイルス感染症の対応にも追われました。緊急事態宣言後の営業再開時には従業員だけでなく、お客様に対する配慮も会社とともに協議しました。

また、コロナ禍のためにがん検診が先送りにされ、治るべき病気が見逃されていく可能性があります。これはとても憂慮すべき事態です。それからテレワークによる健康障害も今後浮き彫りになってくるでしょう。健康診断やがん検診のあり方については、コロナ禍後の重要な課題になると考えています。